

今日は新宿御苑RCと東京セントラルパークRCの合同例会に私が卓話をさせていただく事は大変光栄でございます。又、私はこのように産んでもらったおふくろや親父に感謝をしています。それは喜びも楽しみも苦しみも味わい、生きている間に色々な知識を得られ、自分がこのように死ぬまで同じ仕事にありつけるということは、男として、人間として最高の生き様ではないかなと私は思います。

人のつながり、出会い、これが私は生きていく上には大事なことではないかなと。いつも皆さんと名刺交換をします。そういう名刺というのはみんな顔でございます。その顔でいろいろと自分の人生にまたプラスになることも沢山あるかと思えます。そういう中で、ここに公益財団法人国際労務管理財団の池田節子理事長がいらっしゃいます。私はその理事長から合同例会に話をしてくれと言われました。

私はもう 77 歳になりますけれども、今もってトレーニングをしています。朝も水風呂に入っていますが、今の水は冷たい。入るためにはいろいろと考えながら創意工夫をしてやっていかなければならないし。そして水は飲まなければならないけど、その水も汗をかかなければ飲めない。ですからいろいろと創意工夫ということが非常に大事なことではないかと思えます。

私が高校2年のときにメルボルンオリンピックがあり、その時初めて「重量挙げ」というのを知りました。当時、私は柔道をやっていましたが家が決していい環境ではなく、とにかくアルバイトの連続でございました。私は新聞配達をしております、新聞配達の中で、あ、これはすごいなと。基礎体力というのはこういうものでつけるものかなというのが第一印象。当時の柔道は階級はないです。無差別ですから。東京オリンピックから階級制になりました。それまでは柔道は 100kgの人と私 40kgちょっとなもので、勝てるわけがないです。そんなのいくらやっても意味がないな。だけど、いろいろなかたちにおいて筋肉の強化をしていけば何か自分でもできるだろうということで、最初は重量挙げをやろうとは思っていませんでした。けれどもずっとやっているうちに周囲の方々や仲間が「おまえ、重量挙げをやっている方がいいよ。重量挙げが向いているよ」と。

自分の最初の夢は柔道をやって相手をやっつけてやろうと。やっぱり勝負に生きたい。だけど自分の人生においていろいろと軌道修正、これがダメだったらこれだな、これがダメだったらこれだなと自分で生き様を見つけるまでは相当大変だろうと思えます。私の場合にはそういうかたちで運よくウェイトリフティングにすぐ出くわすことが出来、すぐ転換しました。柔道には階級がないからダメ。ウェイトリフティングには階級があるから私は 48kgから 50kgですから私の階級は 51kg級、フライ級でございます。そんなこんなで私はやろうと思ったけれども、なかなか大変です。親父が東京に出稼ぎに出てしまい、一番上が姉で大正 13 年生まれ。一番末っ子が昭和 24 年生まれ、兄弟は 9 人いまして私は 6 番目です。兄貴は戦争。また姉は私と 8 つも違っておふくろを助けるのは私だけ。要するにおふくろを守るのは私しかない。

おふくろの手というのはきれいな手。これは子供というのは皆なそう思うのではないかと思います。アカギレだらけの絆創膏だらけの手は、やはり何とかしてあげたい。要するに上司が何をしてもらいたい、コーチが何をしてもらいたい。そんなとき、自分が何をしたら喜ばれるのかなというふうに気が付いた人は前に進んでいこうと思えます。気が付かない人は前に進まない。

そういうことで私は何かをしてあげよう、とって何ができるのかというと新聞配達でした。そんなことで新聞配達。見出しが顔です。あいつは吹雪く嵐になろうが雪が降ろうが必ず時間に新聞を持ってくる。これはおふくろの教えですが、三日坊主はだめだよ。前の日に天気予報を全部チェックしなさい。そしてそれによって自分の行動、次の日のことを考えなさい、とおふくろから言われました。吹雪いているときに新聞を持って行ったら大変喜ばれる。「おまえ、こんな寒いとき、吹雪いている中、よく新聞を持って来たなあ」。そうすると「まあ寒いからあたれ、囲炉裏にあたっていけ」というその言葉。これは本当に

何にも代え難い力とか友情、パワーです。またやってやるぞ、時間には遅れないぞと。その一言で次のことをまたやるぞ！と。時間というものは、やはり守らなければダメだ。何事も時間を守るには未然にしっかりと防止していかなければならない。明日、運転するなら酒を飲んでではダメだ、夜更かしてはダメだ。そういうきめ細かなことを自分で考えていく。それを自分で見つけていくということが非常に大事。これは誰でもがやっていることだと思います。やっているけれども、えてしてマンネリ化してしまう。そのマンネリ化の中のひとつでも何かやってしまったら取り返しのつかないことになってしまう。ですから私は新聞は顔だ、見出しだ。そして時間には絶対に遅れてはならない。

その新聞というものをただ持っていただけでも、その人間の心というものが分かるのかなあと。それには何事にも体力が必要である。体力というのが何といても自分の身を助けてくれると私は思うのです。そんなことでとにかく喜び、おふくろを助けるという力です。

私は中学校の時に、「おまえは家のために三宅家のために養子に行け」とそういうことを親父に言われた。高校にも行かないで養子に行くのか。親父に対してはこの親父、俺を何だと思っているんだ、俺は俺の人生だ。親父は親父の人生じゃないか。そんなことを自分で考えつつ、何と言っても温かいおふくろの手、温かいおふくろの言葉、これには叶わない。「はい、分かった」と言った。「ただし試験だけは受けますよ」と。高校の試験だけは受けさせてくれと言って、試験を受けさせてもらって私は養子に行きました。

しかし養子に行った先で非常に苦しみました。男のする仕事ではない。庭掃きとか蒲団敷きとか飯炊きとか、これは何なんだよと。そんな苦勞をしていました。

そういう時に親父に殴られる覚悟で帰りました。案の定往復ビンタを食らいました。だけど学校に行きたい。その当時、入学金が 5,000 円だけれども、その 5,000 円をおふくろが何百篇か頭を下げて借りてきました。そして私が高校に入ることができた。その高校に入ったことによって、私が高校の時にメルボルンオリンピックと出くわすことになったのです。そしてこの基礎体力をつけるにはやはり野生的なトレーニング、科学的なトレーニング、医学的なトレーニングといろいろあるだろうけど私は野生的なトレーニングをした。この宮城県の蔵王の吹きさらしの中で鍛えられたこの体。これで日本一になるぞ、あるいは世界一になるぞと。そんな自分で夢を持って頑張った結果、県大会で 3 位になり、そして高校インターハイでは 15 番になった。あまりの悔しさに、何で力が出ないのだ、練習はやったのだけれどなあ。やっぱり練習と試合は違うのかな。何が違うのだろう。メンタル的なものなのかな。欲なのかな。そんなことを考えつつ、国体はどんなことをしてもインターハイの悔しさをそこで自分がしっかり成し遂げる。

そういう中で第 12 回国体清水大会で私は高校の部で優勝しました。それは何故かというとなんか悔しいから。負けて悔しいから。負けて何にも反省もしない、怒られても何にも反省もしない。これでは前に進みません。なんでこうなのだろうなあ、なんでなんだだろうなあ、やはりその「なんで」ということが私は人生において大きな言葉だと思います。

それがあって私は、大学に入るようになったのです。大学に入って勉強はいいよ。オリンピックで金を取ることもない。夢がものすごく大きかった。しかし家から一銭も送ってもらえないで全部アルバイト。アルバイト、アルバイトでこれは大変な仕事です。しかしそれだってコッペパン、牛乳、こういうものを食べつつ自分で頑張った。その頑張った結果、ちゃんと成果が出る。成果が出ればやはりもうちょっと夢を見ようか。やはり自分の人生において理想なくて信念はない。信念なくて理想はない。理想なくてまた計画がない。計画なければ実行がない。実行なければ成果がない。成果がなければ、夢見ても全然前に進まないだろう。そういう中において一番肝心なことは本当に夢というものは自分で見られるもの、次やれるもの。そういうものを夢見る。夢を見れば見るほど、毎日見れば見るほど自分の夢に近づいていくのではないかなと私は感じています。だから計画というものはどんなことがあっても立てなければならぬ。そしてまたいろいろな計画を立てるには情報を入れなければいけないし、あらゆるものをチ

ェックしながら、いろいろと考えていかなければいけないと思います。

そんなことで、環境というものは非常に大事なことになってくるのですが、私はそういう中、食うや食わずで、東京オリンピック前にローマオリンピックへ。丁度 1960 年、私が大学 2 年生でした。飛行機も乗ったことがないし、海外に行ったこともないし、肉も食ったこともないし。とにかくあらゆるものが珍しくて、とにかくローマに行きました。行ったけれども水も飲めない、食べ物が全く合わない。体のコンディションが悪い。こんな所で戦うのは大変だなと思いつつ、私は 43 日間頑張った。結局全部で 9 本ある中で、スナッチ 1 本、ジャッキ 1 本、こうやってグーっと挙げるもの、これが 1 本。スナッチは手を広げて挙げるもの。クリーン&ジャックは足を使って挙げるもの。これをやった結果、結局 2 番になってしまい自分の思いは届かなかった。自分で悔しくてこの野郎、何で俺は負けたのだ！と思った。

自分で東京オリンピックまで計算すると 1,460 日あります。勝負は一瞬にして決まってしまう。あと 4 年間待たなければならぬ。こんなに厳しいものかなということ、ローマの地で「人事を尽くして天命を待つ」。天命を待つというのはただ待つだけでは何もない。自分で練習をやってその結果、天命があるのだ。練習をやらずしてそれだけのものはないだろうと。そういうことを自分で経験をしつつ、昭和 36 年ウィーン大会で、140kg を挙げれば世界で 1 番、失敗すれば世界で 3 番という試合で、失敗して 3 番になりました。

本当に 3 番というのは苦しい。練習はやった。でも何のために練習をやってきたのだらうと悔しく思いました。日本に帰ってきて、何で試合で力が出ないんだらう、どこが悪いんだらう。欲なのか欲でないのか、たるんでるのか、どういうことなんだよと自分で追跡した結果、今まで 3 日休んで試合に出たのです。では今度 5 日にしよう。3 日完全に休んで 4 日目は軽く自分で柔軟、ストレッチをやって泳いで万全を期しようと。そしたらそれがびったり当たって、37 年にバンタム級で優勝しました。続いてフェザー級にあがってストックホルム大会で優勝し、さあ東京オリンピック！ということで、あとは先ほど見た通りです。

その内容というのは日本をあげなければならぬ。銀と銅はダメだ。金しかダメなんだ。そういうことで私の中身はグズグズしておりましたけれども、親父、おふくろがいて、心配そうな顔を見たら、これは何とかしなければならぬなど。そこで若干落ち着いた。ほんのちょっとしたことなのですよね、自分の気持ちが落ち着くというのは、それを見つけることが非常に大事なことです。そんなことで今度は全部で 9 本ある中で、9 本パーフェクトゲームをやって 397.5 の世界記録で堂々と金を取ることができました。

そして皇太子、妃殿下、今天皇陛下でございませうけれども、ここでは見えないのでこうやって差し出してどうぞ見てくださいと。皆さんのお蔭で取ることができましたと言った。僕はその心がある。そういう志があるのだ。ところが今の連中は金メダルを噛んだりする。冗談言うな。自分から言わせるとバカか！と思う。そういう志が全くない。私達にとっては食うや食わずの戦いで、ローマ大会は無我夢中で、東京オリンピックは不安だらけのものだった。

そしてメキシコオリンピックに弟が行くので弟を何とか勝たせたい。おふくろが「お前、弟に金メダルを取らせろ」と。「かあちゃん、そんなこと言ったって弟が自分で取らなければダメだよ」と。弟には今度「お前若いんだから兄ちゃんにもう 1 回取らせろ」。おふくろというのはそういう面では頭がいいんだよね。うまいこと俺達を操っていたのです。それが運良く私が 1 番で、弟が 3 番で。その世界で兄弟が同じクラスで台の上に上がったのは、いないのではないかと考えています。

これもひとえに、私は日本に生まれたから良かったのだと思います。日本人だからこそ私はメダルが取れたと。東京オリンピックでメダルを取った時に、メキシコに行きました。ブラジル、あるいはアメリカだとかいろいろな国に 27~28 年頃、日本人が出稼ぎに出た時代がありました。さんざん苦労したらしいです。だけど私がメダルを取ったので、大変信頼を得たと言って、僕がメキシコに行った時に日本人会から土下座されました。あー、私はいいことをしたのだな、喜ばせてあげたんだなと自分で誇りと自覚

を持ちました。

今、姪が一生懸命ロンドンで頑張って銀メダリストになりました。そして私がいいか、練習よりもまず英語だよ。それから睡眠だよ。そして短期集中だよ。そうしなかったらリオネジャネイロでは台の上に上がることは難しいぞ。憎まれてもいいから私はそれを言ってあげただけけれども、本人はどこまでそれを自分の心に入れて頑張ってくれるか。とにかく台の上に上がってくれればいいと。台に上ることによって2020年の東京オリンピックに和というものが出来る。皆なの力でもって調教することによって自分の目標、そしてまた日本国のムードが上ってくるのではないのかなと思います。

ちなみにローマオリンピックでは金メダルは、無だった。そして今度リオネジャネイロはどれだけの金が取れるかわかりませんが、それによって東京オリンピックのメダルが決まると私は思っています。

私は今、東京国際大学で一生懸命頑張って教えています。私は東京にオリンピックがくるからわざわざ東京国際大学のウェイトリフティングの監督をやっています。監督なんてやりたくないです。もうさんざんやってきました。今の子供達というのは私達の頃と違うので、怒ってはいけません。自分は忍の一字でいかなければならない。あー、難しいなあ。自分に鞭打っていかなければならないというのは、こんな生き様はないだろうと思うけれども、50年前の東京オリンピックで自分はお世話になったんだ。今度は自分で東京オリンピックをお世話しようと考え、今一生懸命頑張っているのです。皆さんの温かい御支援、御協力をお願いします。2020年の東京オリンピックを成功させて、日本という国は素晴らしいなと全国、そしてまた全世界にアピールしていけたらと思っています。

そういうことでこのロータリーが益々燃えて盛んになって、楽しく皆さんが志があるようなかたちのロータリークラブにしていっていただきたいと思っています。

東京御苑RCの黒岩会長と東京セントラルパークRCの牧野会長と、お互い二人ともいろいろな話をさせていただきまして、お互いのロータリークラブがもっともっと大きくなって世のため人のため、そしてまた自分のため、家族のためにいろいろと頑張っていたきたいと思っています。

非常に寸足らずで申し訳ございません。時間がないのでちょっと端折りましたので、誠に申し訳ありません。今後ともよろしくお願ひ申し上げ、ロータリーの益々の発展をお祈りしまして私の卓話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

<閉会点鐘:黒岩会長>

本日は三宅先生、本当に我々に大変な勇気と感動を与えていただきましてありがとうございます。おっしゃったこと、講演されたことを肝に銘じまして今後のロータリー活動の発展のために参考にさせていただければと思っている次第でございます。それでは第2回目の合同例会を終わらせていただきます。